

## 『グローバル天理』第8号（通巻32号）掲載論文要旨

### 井上昭夫 「巻頭言 天理エコモデル・デザインセンターの実験」

おやさと研究所では、天理エコモデル・デザインセンターなるものを立ち上げた。太陽熱、水力、風力、地熱といった自然エネルギー利用のモデル実験や、いま世界で注目されているエコロジカルなアースバッグ（土嚢）によるシェルター建築、またビオトープの造成などを通して環境問題を総合的に学ぼうというねらいがある。

### 荒川善廣 「「元の理」の探究（17）—人間と存在〔8〕」

永続性(everlastingness)は時間的な次元における不滅性(immortality)を意味しているので、もともと超時間的な次元である永遠性(eternity)とは区別される。永続性とは、主体として消滅(perishing)することなしに、みずからを客体的与件(objective data)として世界に投げ与え続けることである。教祖は、50年間にわたって、人々に親神信仰の「ひながた」を示されたが、明治20年に現身をかくされた後も主体として滅びることなく、魂は存命であるから、その不滅的な働きは「永続性」と呼ばれるべきものである。

### 宮田元 「宗教・スポーツ・教育（12）—宗教とスポーツ〔10〕」

プロテスタントの倫理が働くことを強調するなかで、アメリカにおいてスポーツとどのようなかわりをもつようになったのであろうか。プロテスタントの禁欲主義は、現世の支配のみならず、肉体の支配をも要求した。ピューリタンは、感覚的な快楽や浪費に対して深い恐れをもち、遊び、ダンスなど、自然な、のびのびした活動には躊躇した。働くことのみが救いの必要条件を充たす唯一の人間の活動として許されたものであった。しかし、資本主義社会のもとで産業化が進む中、伝統的な労働の意味は変わりつつあった。工場労働にあつて、機械化、標準化によって人間の肉体の機能が奪い去られていくのに対して、スポーツが人間の身体の機能を回復させる補償の形態として考えられるようになるのである。

### 末延岑生 「ことばと教育（17）—ことばの元を探る〔17〕」

少々大げさかもしれないが、さらに地球上の全生命の運命さえをも握り、未来を託されたものが人間の脳である。さらに私見を続けることが許されるならば、人間の脳は、地球内部の今もなお煮えたぎるマグマ、地殻を擁し、その上に地上の樂園すなわち“陽気ぐらし世界”という帽子をかぶり、さらに脳自体を越えた、頭上のかぎりない宇宙(もともと脳神経細胞の数は、まだ今のところ150億、天の川

の星の数程度だが)さえもすべて包み込む動体といえるかもしれない。借り物としての自己を自覚し、神の存在が認知できるというのは、脳のこれらの三つの器官のバランスがしっかり取れた高度な精神的ホメオスタシスの状態ではないかと思う。

さて、40歳を過ぎると脳の細胞は一日に数万個壊れるといわれる。このことから、「人は40歳を過ぎると外国語学習ができない」などという理論を大上段に掲げる言語心理学者たちが大勢いる。が、たとえ外見は年老いているように見える人でも、成長刺激ホルモンが働くと、脳がニューロンとなりうる「原種細胞」を作り出すよう指示を出すことが分ってきた。

つまり人間は年老いても、気持ちの持ち方一つ、つまり細胞のスイッチを on にしている限り、たえず陽気ぐらしの目標に向かって進むことができることを証明している。これは勇気づけられるうれしい発見であると同時に、このことは一方で、暗い過去の未熟なマイナス思考的な科学知識が、いかに人間のはてしない未来を打ち消し続けてきたかをまざまざと物語る。人間の崇高な陽気ぐらしという目標からかけはなれた科学のむごさ、無責任さである。

### **佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌(15)戦前のシンガポール伝道[2]」**

明治45年1月、マレー半島に戻った板倉タカは、各地を転々として布教した。病人を救ける事はできるが、信者とはならなかった。意を決して国際都市シンガポールに居を構えることになる。ここでは、不遇を託っていた在留邦人が主な布教の対象となった。大正7年9月、信者ができはじめたので、タカは、教師の資格を得るために、教校別科に入学した。翌年卒業と共に、海外伝道の許可を得て、シンガポールへ戻り、大正11年11月5日、シンガポール教会の設立をみた。

### **堀内みどり 「天理異文化伝道(30)天理教のコンゴ伝道[29]—ノソングア会長就任(1971-1989)[3]」**

1975年4月26日にノソングアがコンゴブラザビル教会の4代会長に任命され、高井の長年の思いが結実し、真柱を迎えて執行された4代会長就任奉告祭は、高井にとってまことに感慨深いものとなった。高井は、これからがコンゴ布教の本当の始まりと思った。高井は、ノソングア会長任命と同時に開設されたコンゴブラザビル出張所の初代所長として、ノソングア会長就任後も約1年間コンゴに滞在し、コンゴ人の手に委ねられた教会をサポートした。以後、コンゴの布教は教会と出張所という体制で進められていくことになった。

### **小滝 透 「天理比較神秘論への試み(32)宗教と世俗[4]」**

今回は、キリスト教原理主義との比較の中で、イスラーム原理主義について述べてみた。キリスト教とイスラームは共に原理主義と名付けられる思想潮流を持っているが、その違いは鮮明な対照をなしている。次回はそれをさらに展開してゆきたい。

## 小林正佳 「芸術・癒し・宗教（31）―踊りの中での同調」

何人かが一緒に踊る場合、踊り手は互いに動きを探り合い、相互の同調を図ってゆく。特に民俗芸能の場合、振りの終りや次の手への変化が、最終的にはその場その場で決められる。

一緒に一つの振りを動かそうと思ったら、動きを見てからついてきてもらうのではなく、動き先立つこちら側のからだの中の変化をあらかじめ読み取ってもらわなければならない。こちらかといえば、それを伝えなければならない。

こうした同調は、囃子といった一つの音楽を共有することで一層容易になる。何より囃子の役割は、そうした共通の波動を演者のあいだに生み出すことにあるといってもよい。

踊り手の中でも、先に述べたのと同じ仕組みで、口唱 歌を媒介に、あるいは唄の言葉を媒介に音と動きが循環している。さらにはその循環が重なり合い、踊り手どうしのあいだにも、踊り手と囃し手を繋いでいたのと同じ相互関係が生まれてくる。互いの動きを直接自分のからだに写し取りながら同調し合っているといったらよいだろうか。

## 上杉武夫 「都市の再生に向けて―アメリカ通信（23） 東アジアの庭園 [4]」

自然主義と理想主義の点から韓国の独特の自然観はその庭の形態と機能に明確に現れている。特に、韓国の庭にある方形の池と円形の島は李朝朝鮮時代に顕著に 現れている。韓国と日本の庭園はどちらも中国庭園の影響を受けて始まったが、それぞれ独自の地勢と人間の行動様式のもとで異なった発展をした。両国とも中 世における社会的経済的影響が異なる庭園の形態と味わいを作り出した要因となっている。東アジアの庭園についてはここまでとし、次回からはアメリカの都市 環境にまつわる話に入る。

## 特別掲載：第2回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム2002（4） パネルディスカッション「天理ラグビーの真髄と人材育成」 [2]

前号に引き続き、シンポジウム「天理ラグビーの真髄と人材育成」の第2部パネルディスカッションの内容を掲載する。

まずは、田中伸典氏のフランス留学時代、天理高校一部コーチ時代のエピソードに始まり、続いて、

ハツ橋修身氏が天理ラグビーの環境について言及した。最後には、天理高校二部在学中(昭和48年)に全国高校ラグビーフットボール大会への出場経験を持つ藤本雅夫氏が定時制ラグビー部の練習事情について言及し、加えて昭和30年代後半に二部ラグビー部のコーチを務めた櫛引英吉氏が当時のクラブの動向を説明した。